

おはようロスアンゼルス

倫理研究所U. S. A. 南カリフォルニア倫理の会

6月号会報

2202 W. Artesia Blvd. Unit L Torrance, CA 90504

rinriUSA711@gmail.com

2018年(平成30年) 6月1日(金)

NO. 202

倫理文化セミナー

四月十三日(金) 午後七時より八時半まで文化部、甲斐靖幸研究員を講師にお迎えして、秋津書道会としまなみ短歌会の合同セミナーが開かれました。金曜の夕刻にも関わらず十四名が参加しました。

甲斐講師は、書も短歌も倫理では生活の向上、心の浄化を目指すという共通の目的があります、と最初にお話しくださいました。

- ① 秋津書道の実習として、普段学べない「落款(らつかん)印」の正しい押し方のお手本を御教示下さいました。ポイントとしては、
- ② 余紙で前もって作製したラミネートサンプルの印を使い、どこに印を押すか見当をつけ確定する。
- ③ 必要に応じて定規を置いたり、下敷きを敷く。なければ半紙を重ねて敷く。
- ④ 印を押す箇所を爪やガラス瓶の底でならしてインクがつき易くしておく。
- ⑤ 朱をヘラで団子状にこもりさせておく。
- ⑥ 紙の縁と平行に、名前の中央延長線上に印を置いて、体重をかけて暫く押し続ける。
- ⑦ 印を真上に持ち上げ紙か

らはずす。

⑦ 二個目の印は、一個目の印に平行になるように押す。

二、しまなみ短歌の実習では、短歌でラブレターを書くというもので、作者の家族、友人、ペットなどへの大切な思いを込めた短歌をそれぞれ詠ってみました。吟行会などのような場で詠った歌に良い作品は生まれまいと言われていますが、参加者皆即興とは思えないほど素敵な良い出来と講師からお褒め頂きました。

三、丸山敏雄先生の日記から抜粋された公には公開されていない非常に貴重な資料「書道入門手引き」秋津竹陵、を皆で読み、何故書を習うか、また上達の秘訣等を再確認していきました。

(参加十四名)
(橋本裕子記)

秋津書道会

四月十四日(土)、午後十二時三十分より三時まで、倫理オフィスにて甲斐靖幸文化部研究員をお招きしての秋津書道会が行われました。長谷川松子・秋津書道チーフの司会で、先ず『書道箴言』を唱和した後、滝川歌子書道講師

の甲斐研究員へのお礼の言葉が述べられました。研究員の講話は、『竹陵書言・33』についてでした。

敏雄先生は、筆を大切に扱うことを「筆を調教する」と書き残されました。自分と一体である筆を大切にすれば、筆の使い心地がどんどん良くなり、ずつと働いてくれる。これは「物は生きている」の証明であります。倫理の言葉で『万物生々』(全一統体の原理)と言い、全てのものは一体であることを示しています。例えば、家族が幸せであれば自分も幸せに感じ、これは、宮沢賢治が残した言葉「世界人類が幸せでなければ、個人の幸せはない」にも通じます。動植物が幸せであれば人間も幸せということになります。全ては見えない世界で、時間、空間をも超えて繋がっているのです。「ですから筆を持つ前後には、必ず『よろしくお願ひ致します』」「ありがとうございしました」と挨拶し、感謝の心を形に表しましょう」と結ばれました。

実習では、会員が研究員の添削を受ける際、滝川秋津講師が、その人の紹介をされました。次々と会員の作品を目にする毎に、南カリフォルニア支苑

のレベルの高さを何度も口にされる研究員でした。

最後に倫理文化講演会で行う秋津書道のデモンストレーションの為、甲斐研究員にお願いし、カラーペイントを使ってエコバッグに漢字を試し書きして頂きました。その結果、黒地のバッグに白のペイントで当日のデモンストレーションを行うことに決定。

『嵐』『碧海』など、研究員が書いて下さった素晴らしい作品は、当日のサンプルの手本として飾らせて頂きます。

競書作品を書き終えた会員もバッグに試し書きをし、盛り上がり、時間となりました。長谷川チーフが最後を締め、書道会を終えました。

お疲れの所、色々な字を書いて頂きまして、甲斐研究員、有難うございました。

(参加者・十五名)
(草野律子記)



